

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2018. 7



# 地中海

一一〇一八年七月号（通巻七二三号）

◇今月の二十首詠……さんざめく春

西堤啓子 2

■作品[A]

萩 葉子・白子れい他 4

萩原嘉津子他 20

A C B A

■オリーブ集

寶藏八重子他 46

橋場 節他 62

関西正子他 78

久土日薰・黒瀬紀子他 40

小田淑子・山田香代子 16

久我田鶴子 18

福島発・風のたより

石井悠子 60

◇今月の二人

今月の二人・作品評

私と短歌との出会い (19)

宮西千代子 19

最近の歌誌より

〔編集部〕

◇シルクロード・カフェ

(責任編集) 木村文子 38

平成30年度A欄昇格者

■歌壇月旦

文語と口語

檜垣美保子

クリップ…… 96

神田通信…… 表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

■五月号作品批評

A…… 小野雅子・山野幸司

永塚節子・新明彰子

B…… 岩里周英・植田和子

C…… 川野知美・田口紀久子

68

94

95

60

# さんざめく春

西堤 啓子

墓苑の空覆い咲く桜木に亡き人々もさんざめく春

吐く息の曳き波となり桜吹雪ゆるき流れに身をゆだね行く

山下り東福寺へと続く道スニーカー白く花びらを踏む

身を揺する風狂の人となり果てて桜追いかけ時刻表繰る

月を浴びほころぶ桜枝に満ち山峡にあり星を巡らせ

関山と名もなつかしき八重桜ふわりと甘く大阪の春

菓子箱のごとき車両の渓流に沿いて夢見る樽見鉄道

揺られ行く小さき車両は断層の谷筋走る桜目がけて

昭和三十二年生まれ。  
天平ケループ所属。  
歌集に「カビバラを抱く」がある。

雪の峠越え行きしどう天狗党回る時代の断層に消ゆ

あまご食めば清流の香のほろほろとぬめりに苔の青き滴る

根尾川の瀬音響かう軒下に燕の戻る夏が近づく

一日見ん淡墨桜天地にいのちの涯<sup>あめつち</sup>の光と立たす

白山の神覆う空山々の間に見えて細き春の雨

雨に逢う淡墨桜散りかいて遠近人の心搖るがす

散り際に淡墨の色加わると聞きし日遠く今逢う桜

さまざまのことありし世を西行のなべては桜 桜の方へ

水脈のかき消すように失われ桜吹雪に母の座す見ゆ

吹きすさぶ夜嵐の声うつなく明るみのもと落花を悼む

水を抱き夢幻のうちに年を経て花を葬るいくたびの春

葉桜のみずみずとして匂う午後光を食べて地下に伸びゆく

# 作品 A

萩

葉子

葉桜

銀

ぱぱりょうこ

B型

鹿

郵便局移転にともないバス停の名が変わりたり黙読をする  
葉桜もたちまち過ぎて静かになり深呼吸ひとつ歩み緩める  
列島の海岸線に原発の所在地の丸印意外に多い

若者が身幅の倍に脚ひろげ満員電車のシニア席占めてる  
東海道五十三次歩き旅大雪の朝日本橋発ちたり

残暑のなか三条大橋通り着き皆で歓喜の声をあげたり  
ゆらゆらと大きな魚が五、六匹橋の下に身を寄せている

白子れい

すき間風

洛

浜谷久子

青年の樹

地

あかあかと小径いろいろ花しへを踏みまどいやく驚まつみち  
モーオキロ・モーオキロヨと鶯の声の届けり姿のあらず

昨夜の雨の名残り葉先に光らせて疏水辺の徑みどりをふかむ  
若みどり濃みどりぐいぐい迫りきてこころも身体もみどりひといろ

短歌の友茶の友失い身のめぐりすき間風吹く卯月のはてを  
母の日の近づきくれば母ならぬ身の淋しかり年経ることに

淋しき日は夫の墓前にて線香の燃えつくるまでのことこのこと

じゃがいもの芽はふとぶと土を割り存分に吸う太陽光線  
町中をふわりと浸す春の気は畑野の色をたちまち変える  
なだれ来る春に溺れる冬野菜花を咲かせて風に蓬ける  
細い葉はうぶ毛と軽く吹かれいるメタセコイヤの春はやわらか  
ひげ面を整え美男は大空へ直ぐ立ち上がる青年の樹は  
あと一步踏み出そうとして聞く春はつばくる朝の高い鳴り  
やや長めの糸を通して付け直す鉗は夫の木綿の畠着

寡黙なる男の病みたる舌癌はいよいよ口を重たくさせたり  
ひとつぶずつお粥をつぶして食むさまをふいにおもいいて箸のとまりぬ  
吉凶は神の采配にんげんはそのきまぐれに振り回される  
淋しさをつれあいとして帰路につく 放心よりはよしといたわりあいて  
月満てりブロック塀にわが影を折らす魂胆 足早に過ぎぬ  
雨葉月ひとを泣かせて疾りたりひたいに一滴しるきを残し  
黄色が好き 言いたれば そくぎに「Bでしようそれも半端じゃないB型」と

浜本 芙 美 詠り

・夢 藤川和子 余光

・眉

待つことの多くなりたる日送りよ前へ前へと一步ふみ出せ  
無い子には泣かぬとしきりに言う友の深きかなしみ垣間みており  
讃岐の地に住みて七十年今にして何か懐かしきふるさと詠り  
野の中を走りて遊びし黙草か巻耳あまた犬のつけこし  
動物のいくつかの形ひそめたるおどろしき雲東へ動く  
チユーリップ明日にも開かん鉢植えをわが玄関に置きてゆきたり  
仲間より一挙一動きづかわれ嬉しき心に寂しさきざす

檜垣美保子

雨

・昂

雨の日はこころふさぐというははが花の木の名を問う ハナミズキ  
飛び石の三つ目にいつも立ちどまり二歳の男の子八つを渡る  
目を閉じて聞きわけている雨だれ 板を打つ音かねを打つ音  
音すこし近づきふくらみ遠ざかる路面電車の旧式車両  
信号を待つ間を共に待つごとく路傍に揺るる花きんばうげ  
みそ汁の実は春のものいただきしたのこわかめ庭のさんしよう  
鍋底をはみ出だしたるガスの火の冴えまさる青みつめていたり

福田庸子

灯らぬ窓

・今

藤森巳行

台北

・銀

山城の跡をめざして大木の花吹雪浴ぶ夕暮れの道  
くつきりと車体の跡の残る土くら花びらそこのみ消えて  
本当は働くせ方改革夕暮れに灯らぬ家をふやす政権  
丘に建つ住宅街の夕暮れは灯らぬ窓が軒みな続く  
丘の上に整へられたる街並みのよそよそしさよ人帰宅せず  
核戦争の末は生物滅亡をペリー提督の子孫予測す  
文明の極みの果てに消えゆきし太陽系外の星にもあらん

春嵐つぶてのごとく残花飛び老女のまなこは彷徨はじむ  
またしても寒の戻りにいたぶられダウソを繰ひ徘徊せむか  
残雪のことき馬酔木の花房がかたみに触り乾く音起つ  
掌に載するアセビは冷いやり垂るなり友の詠まれし歌を忘れず  
昨夜のうちあしひは白飯撒きしま掃きつつ飢ゑし時代ありにき  
こまやかに川面に消え入る穀雨の雨ながき日暮よわが誕生日  
おぼしまに一駆預けぬ黄昏は永くゆつくり余光を失ふ

藤田美智子

指

・新

避けきれず挨拶を交はす一瞬のぎこちなさ相手の首にも見たり  
濡れ髪の重たきままに更けてゆく夜をひとつのことにつだはる  
宰相Aと夢に争ひゆたりと荒き寝言を息子に問へば  
チヨーク持つ感触が指に残りをり授業なしる夢より覚めて

森永のミルクキャラメル聞くとき指は小さき仕草楽しむ  
いやいやをするごとブランコは揺れるなり呼ぶ声に児が去りたるのちを  
夕闇に川面は銀色に光りつつ空に流れのかたちを示す

金婚の記念に春の台北へ老人二人に次男が付き添ふ  
美味しくて二日続けて通ひたりティタインとふ小籠包の店  
贅沢なマンゴーたっぷりかき氷二百十元妻とシェアする  
オートバイが大人一人と夫乗せて台北の街を疾走してゆく  
お一凄い車の間を走り抜けるバイクがつきつき何十台も  
中国の四千年の歴史覗く三時間足らず故宮博物院  
余りにも人出の多さに驚いて妻と手を繋ぐ台北夜市

船田清子 春の落ち葉

・天

松永智子 夜

・夜

・嵐

梢には照る若みどり上りて樹下に去年の葉ふりこぼす春  
降り積みし落ち葉をしみじみ思ひ見る世代交代とふ生命的の棲理  
去年までは若葉に心高ぶらせ今年は落ち葉がなぜか気になる  
卯の花もさつき・つづじも一齊に開く耀ひ うちのめす雨  
春ながら色も香もなきわが庭のコンクリート一色 心はづます  
はるかなる黄砂の旅路のもて来たる雪の天山 まぼろし杳く  
白楊の新芽のみどり天を差しオアシスの水路に水やきらめく

牧雄彦

昔

比治山ゆ見放くる町に春日差す原爆の惨いまはむかしか  
七十三年前はすでに昔にて原爆のことなきごとし 今  
七十三年前は昔ぞ忘れよといふのかおだしき春の日に問う  
少年の日のたしかな記憶なり原爆とこの元安川と  
頂きにヘンリー・ムーアの広場ありブロンズ像は春の日はじく  
宿の湯に浸りておもふ今日見たる布の造形糸のかがやき  
たそがれて紫いろの瀬戸の海島また島を車窓より追ふ

松浦禎子

仏日庵

・羊

水引の足にからまる段だんを歩一步大切仏日庵まで  
時宗公のおもかげいすれ白皙の坐像を拝す秋深む日に  
丸窓の障子をもるる秋日ざし仏日庵の今日のわたくし  
緋もうせん敷く椅子に坐し一椀の秋をいたく幸せにおり  
千羽鶴の風呂敷を胸にゆきすき佳人の影も土塀に低く  
樓上に十六羅漢の鎮座せる山門よりいまも見下ろすものは  
おどろうる姿まさまさ目の前を過ぎゆく老師も今日のえにしに

宮本靖彦

閑ヶ原

・凌

散る花を踏みつつ歩む関ヶ原東西武将の歴りはや  
黒壁のガラス細工を目の櫻に八百屋に求むわらび二百円  
満員の列の進まぬ彦根城巨木の木組つくづくと看る  
胸をつく階段のぱり四層の天守ゆ望む花曇り湖景  
牡丹の早咲き嬉し下見時の氣苦労の消ゆ乙訓寺に  
花過ぎて水田も小じわの雨模様若葉山染む丹波篠山  
薄紅の花みづきに想ふ事務室の粉紅と呼びしかの人

夜ふかく床に散り敷く芍薬の花びらしろし逝く春のいろ  
芍薬の花にほふ夜ゆゑよしのあらず酒きくるかなしみのあり  
花しろく艶にしづもる聞ふかし少しく冷ゆる春の夜の音  
芍薬の花に呼ばること立つ四月をはりの真夜中の聞  
豪快に散り敷く花びら冷えしろく終なる華やき芍薬の花  
五月聞しやくやくの花しろければ散りて嵩なす花びらの冷え  
夜半を醒めゆゑよしのなくことば消ゆしろき芍薬花の香みつる

三浦好博

五月の白雲

・銚

三 好 聖 三 猿

・伊

もとむらしげと

ヒト

・そ

両の手に顔を埋めて眠りいる猫に五月の風が流れる  
年下の男一人と酒を飲む一人は三十年を超えて出会える

手羽さきは手ごろに焼けて美味である三人ともども煙草吹かしつ  
仕事場が面白かったころのこと一人ともどもはみ出していて  
仕事場が面白かったころのことが才覚ありし二人はいまも  
三好さんの送別会をしてねーからさ、してもらつたさ、してねーてばさ  
午後からは雨の予報の朝にして猿がしきりに枇杷を食べている

御 代 田 澄 江

・茨

リクエスト リクエスト

リクエスト本入荷の報せ図書館より大江健三郎氏受賞後の講演集  
十九歳より大江氏の著作に親しむも受賞後の作は未だ少なし  
読むほどに愉快なり深き指針もあり井伏鱒二を激賞しをり  
井伏鱒二を遅くも読みぬ黒い雨凄いすごいと声に出だして  
故郷の第づくりの老夫婦小春日の中穂やかに笑む  
わが使ふ筆もこの里の作ならむ昔行商ゆ求め長く馴染みぬ  
錦秋に訪ね巡りし東御苑三極・楮に想ふ和紙の里

茂 木 毅 丸神の滝

・埼

茂木 毅 丸神の滝

丸神の滝もひさびさ虚しきは桺の大樹のあたら伐られて  
滝のうへ雲間より出し日輪の虹色の量美しかりき

山かけの夕暮歌碑も苦むして「出みづかは」なる一首を刻む  
妻の右目お岩さんのやうに腫れあがるまだ春なのに真夏型なり  
紹介状持ちて名医のもとへ走る診断に急性涙嚢炎とふ  
眼科への道に見かけし薬師堂妻の眼病にご利益ありや  
薬師堂に真名板太鼓ひびく日の花祭りなり甘茶いただく

八 乙 女 由 朗

木の相

自動運転の車が人を轢きしどうできる注意は人間がせよ  
蓋があがり終われば水が流れたり後始末する猫にも劣る  
テレビまでの距離を歩かぬ日常に歩行器を踏む現代人たち  
ヒトという種族ありしと千年の後の歴史書はA.I.が書く  
ヒトという種族ありけり利便さを求めて今はタイダムシとなる  
ものを掴む機能のあらぬ猫の手が掴まんとして豆を転ばす  
進化せぬ丸き猫の手楽しかり搖れいる紐にパンチ繰り出す

風に揺れて頭を振る見れば振鈴の音なきさまか海棠の花  
新緑の狭間に萌ゆる葉の赤し「血汐」と呼ぶる楓身に沁む  
庭木木はわが生きざまに丸められ肩痛むべし青くなりつつ  
更に更に天に伸びゆけ沙羅三樹丈知らせ来よ頭首削がねば  
根もとより出でし若木に咲かせんと古木切り捨つ折りを込めて  
剪定を終えし庭木を眺むれば憐れなり刈られし坊主の頭  
半端なる生きに馴れ來し身なれども鍊研ぐなり切れ味欲りて

山 下 雅 子 五 月

山 下 雅 子 五 月

垣の枝のゆらめき映るカーテンにつとよぎる影小さき一羽  
さみどりに明るむ北の窓一面柿の若葉の五月の芽吹き  
三年目の篝火は葉の間よりつんつん畠のわが灯なれ  
しんと沈む庭の隅よりひしひしと動く気配す若荷の辺り  
炊きたての筍ごはんに山椒の香りてめぐる五臘六腑を  
たわ易き日々の動きの戻り来よ見えざる脆き骨きしみたり  
二十軒の町内班長終えしこの充実感よ高が知れるも

横田敏子 ふるさとの空

朝井恭子 地下道

森

真っ青な空の恋しき晴の日の涙色なる横浜の空

退院し初めての試歩に触れて行く光も風も肌にやさしき  
草花や風の匂いの中歩み戸外の息吹たっぷりと吸う

うぐいすの声聴こえくる公園の森陰の道足どり軽し

イングリッシュガーデン訪えどとの薔薇も固き苦に夢抱きしまま  
薔薇の花咲く頃わたしはもう帰る三月過ごし娘の家を

雨上がりの空はほんのり青み帯びるさとの空に少し近づく

吉内尚彦

胃カメラ

・浜

さんしゅゆの一樹の花の黄なる道胃カメラ検査へ思い灰色

普段なら正常なるに胃カメラの前の血圧百七十八

あちこちに上向き矢印要注意血液検査の結果に見入る  
同年の亡き人幾たり数えみる胃がん腸がん肺がん多し

「大丈夫と思うが胃カメラ受けましょう」やさしき女医の顔のきびしき

胃カメラの検査十分あまりとうわれには長くながく思える  
終活はいつになっても出来なくてはや葉桜の空を見上げる

吉永惟昭

地震後二年

・熊

容赦なき矢の光陰は地震より指二つ折るうた連休  
倒壊の墓碑はいまだ珍しく残す垣根の卯の花匂う

震えし夜闇の濃き香は朱葉花竹藪越えて今朝も迫りく  
余震時もブルーシートに添寝して癒しくれしは大根の花

廃棄物山積されいし庭跡にひよろひよろボピー花のボッポッ  
師の賜ぶ地震見舞の一一番茶香りほだせる側隠の情

世話好きの「己」があやまち咎む白俯きて咲く小手毬の花  
余震時もブルーシートに添寝して癒しくれしは大根の花

自らの立つる靴音従えて一人し歩む地下道長し

馳染まさる数字の並ぶ「マイナンバー」まなこ廢らせば呪文めき見ゆ

法名の「報道居士」なる夫の墓の供花に添えたり一本のベン  
今年も夫の正忌のめぐり来ぬ熱き珈琲先ずは献する

葬りより帰りて脱ぎし喪の服に籠りいし香か仄かただよう  
延命をこぼみて逝きし友の意志諾いつも心悔しき

花水木暮れ残りいる庭園に逝きたる友の面影偲ぶ

磯田ひさ子

茱萸

・森

みんなみの海の祖を思はせる楠の木 楠の木風に驕立つ

地中海の会員二千人を越ししころ益荒男多き茱萸支社ありき

茱萸の葉の千枚の歌を支社の名にせし男らの万葉調はも

茱萸支社の心意気かな國つ神荒ぶる寺に師の歌碑を建つ

海風の吹きくる寺の歌碑の前に幾たり立ちしやけふわれの立つ  
まぎれなき「進」の揮筆胸に沁むしんねうの払ひほそくみじかく  
鏡忍寺訪へる香川も弟子もまた翳りもあらぬ男盛りなりしよ

市原やよひ 麦畑

・萬

こわれたる巣の修復の検討か二羽のつばめの出入りはげしき  
つばめにも器用不器用あるらしくなかなか出来ぬ巣を見上げおり

花の季に少し間のある古代蓮葉の広がれる池をめぐれり  
花なくも夫と連れ立ち来たることそれのみでよし五月の風よ

青き穂のたなびいている麦畑ここはうどん里と言つらし

浮き橋を子が押す夫の車椅子青さき一羽ふいに飛び立つ

久々に遠出の夫が見せていく目だかの袋と満面の笑み

市原志郎 将軍塚

・萬

奥田陽子 小動物

・羊

木香薔薇たわわに咲きて揺れており四月に入りて風新しき  
片方の目のみに映る初夏の景新しきかな木香薔薇は  
揺るのみの庭の木木なりいつの間か伸びて囲める我が家となりぬ  
はなやきの時は過ぎたり我が生の終わり間近し今日も日暮るる  
若葉あふる古墳群の真中に立ちて居たりき生ありし今  
將軍のゆかりの里を歩みて夏の來たるを知る今日なりき  
かつてこの地を治めし者の墓處今その上を飛行機が飛ぶ

大浪美雪

庭

・森

こみどりの木賊を刈りぬ錆びしもの擦るようなり心騒立つ  
つけざま飛碟投げらるる音にして彈ける藤と知るまでの間  
庭土に半ば埋もれし藤の莢少しく反りて刃の如し  
いつの間に誰が植えしや楠の二階にとどき風に揺れおり  
風に乗り軽く揺れる楠の丸みおびたる葉すれのやさし  
楠に思いはせるも大樹なり庭には無理と鎌を当つ  
切り倒す幹より立つる樟の香にやはり楠と息深く吸う

奥田清和

膝枕

・大

柏原宗一

躊躇は頂上から

・羊

いくさ破れ混沌の代に育ちきし古き教へ子幼な日の声  
豪語して醒めては眠む天下の権醉ひて至福の膝枕とや  
セクハラとふ未熟語とみにはびこりて大和さむらひ立つすべもなし  
意を決し虎穴に入れど虎児を得ず裁きにひづむ女性やいかに  
いっしかに花咲く丘と人言ひし丘の学園時世移らず  
急坂を生徒と語り往き来せりボプラ並木に照る夕ひかり  
伏見へと続く街道生家跡立ちてしまひ風の音きく

咲きそめしさくらの下を往きかうと見知らぬ人に声かけられぬ  
坂の下は桜まさかり暮れゆけば見あぐる人に風の立ち来ぬ  
留守電を聞きい耳の反応す背後に泣けるおさな児の声  
絹文の人の遺せる形ありて幼き者の指などおもう  
おさな児と小動物とひびきあう思いあるらしふとみづめあう  
ブランコの光に揺れていたりしが弾める体まっすぐに来る  
総身にさくら花びら浴びて立つちいさき者は遠く見ていん

小野雅子

木

・羊

春四月、小学校と保育園の道をきかれる隣町にて  
「木は静かな炎」と詩人うたひたる葉のみどり濃き貝塚伊吹  
ゴッホ描く糸杉と同じ木のかたち貝塚伊吹とともにヒノキ科  
あの角を曲つた道で話してた話題そのまま思ひ出となる  
実りゆくあをき苺は身を垂れてほのかに兆す淡きくれなる  
知らぬ間にクリップ錨びて止めおきし白き紙片に汚れをとどむ  
どの人の鞄にも傘の柄が見ゆる夕方雨といふ日の車内

頂上から四つ五つと咲きみだれやがて枝ごとすべてが咲かむ  
はなやかに躊躇咲きをり頂上に午後の陽うけてただゆるのみ  
一枝に二つの花が咲くやうに花の上向きにやどるを見たり  
躊躇は陽にかがやきていただきのぐあひが何をかたらむ  
二日経つと喝采に似て色模様のある時一瞬のさばきのやうに雨が  
午後に入り咲かるとするは一瞬のきらめくものあり雪にかはりぬ  
四月半ばながら雪降るとしばらくつめたいものがあとをたたない

菊岡栄子 散りゆく

・連

草刈十郎 旅心

・世

子どもらの作りし行灯やらゆらと噴水通りの夜を華やぐ  
高校のプラスバンドのコンサートを行かぬ故われも行けざる  
咲き出だしパッと散りゆく桜花愛してやまぬ日本人われら  
鍼灸師鍼を打ちつつ子ら連れて太陽が丘へ行きしを話す  
ベッドの柵持つ手放さんと思えども意思に逆らい外れぬこの手  
近頃の悩みの一つ記憶力とみに落ちたり思い出せない  
頭また手も痛むゆえ鍼を打つ少しは楽になりてうららか

菊地栄子 崖縁 湾

國井節子 埋み火

春

やや冴えて背を押しきるは南風下り坂道跳んでみようか  
卒業式終えしばかりの少女子の声とも思う今朝のうぐいす  
たわむれて猫の立きて爪の痕細く鋭き山椒の棘  
「安いね」と声を合わせて手を伸ばすプロックリーは香川県産  
先手先手に抜かんとするも追いつけぬこの小さな庭のあら草  
一齊に咲くを待ちしか水仙の群立つ薺片方をむく  
是の世は崖つ縁だらけ社より下る石段に足すくみたつ

木村文子 赤ちゃんの棊床 羊

小泉泰清

そこはかとなく  
・う

花菫の星のごとくに群れ咲けば此の世のはるは星の満ち満ち  
雨に耐へ風にも人に踏まれてもなほ上を向き咲けるたんばば  
庭石で滑りし夫の叫びごゑ石を見るたび甦りくる  
いつの間にとろとろ眠りふと目醒む夢とうつの境も知らず  
哺哺と夫のおかげで生きらるるこの身励ましするひたたさむ  
埋み火のごとき力を搔き立てて漸くともつやる氣と元気  
ゆつたりと流れる川の深みにて時を待つらし真鯉の群れは

米ぬかと塩と水とが混ざり合いはじめまして私の混沌  
深呼吸しながら混ぜながら時の生まれる理論思いぬ  
捨て演けの野菜はどうが好きでしうプロックリーの茎を底に  
ほのほのとあけゆく空も入れてみる雨の香りもみぞれの音も  
ぼそぼその様に昆布を差し入れて気持ちなだめて夜を閉じおり  
混沌の密閉容器ビッグパンが起きるのならば真夜中だらう  
四日目にふんわりふくらみ赤ちゃんの糠床となるぶぬぶぬほつべ

町内の高齢男性いちばんに そこはかとなくこころゆらぎぬ  
老いたれば些細なことも抜け落ちて注意されしも一再ならず  
姉たちと会話乏しくすごしきて逝きたる今や悔いのこみ上ぐ  
連れそひて六十年にあとわづか妻のやさしさ骨身を伝ふ  
春きたり草の元気に埋まる庭ちにすわりこみえりつひきぬ  
老いのはて云はずもがなと暗然と迫りくるもの仕方なからん  
彼地に居る姉の御靈は安かれと宗派違へど朝な説経す

熱燗を酌みあひ昭和の激動の時代を語り話題尽きざる  
珍しく暖地に積みし淡水も仮想通貨と共に消えたり  
部屋隅に置かれし花びんの紅の濃きが寂しき冬椿なり  
雪晴れの町の静けさいつもとは異なる静かな佇まひ見す  
雨降りて野は沈黙を解き始むやがて活き活き春動くなり  
春立ちて地図にふくらむ旅心されどからだは意のままならず  
楽しげな音たて流るる春の水なに語らひつつ流れゆくのか

河野繁子

風に舞う

・雁

近藤栄昭

至仏山

・福

うず潮のぐるぐる廻る底ひより逝きにしひとり出でてはこぬか  
病得て為すことなしともう出せぬ本の原稿二千枚とか

うた読みはいいな成りしは自がものと遠き日の言また甦る  
鐘の音近くに聞こえ阿波踊りの練習なりと夏の便りは

雨水の溜りしヘルメットのみす捨てて被りし話たわい無けれど  
彼の世には仕事のなきや書き溜めし原稿持たず旅立ちゆけり  
手もとなる第七巻のセータ ひらひら紙の舞う今朝の夢

小西美智子

つづじ

・大

健康寿命いつしか過ぎて襲いくる目覚めしのちの不穏なめまい  
心音の高きを聴きつもの読むかつてなかりし身内のうごき  
この春も香に誘われてとびきたる太れる虹がつつじに遊ぶ  
われとつじいそれが先と思うまで細りて来たる枝をかなしむ  
アスファルトをつきぬけ生える竹の子の力羨しも病みいる身には  
樟若葉風ふくらみきらめけばトトロの森に出かけてみたし  
遠景にひとりわ高く百合の樹の梢は黄緑いろにけぶらう

小林能子

時間の薬

・羊

指先にやうやく触るナースコールボタン丸きを一度、二度押す  
ウォーターマットに駆幹投げ出しうつらうつらと時間の薬  
ばかりばかりマットの上に寝ては覚めそれを見てゐるもう一人の吾  
昏き流れ迫りてあやし波の間に遅々の舞ひ見え隠れする  
猩々の波の上ゆく足運び追ひつふうはり心地よき酔ひ  
赤づくしの猩々の舞ひ幻影ならず言祝ぎの酒壺に溢れて  
猩々の姿かき消え薄ら日のくする病室に独り醒めをり

近藤芳仙

浅間山

・信

ふところに抱かるるやうな安堵感。山に帰りしことを告げたり  
にこりなく澄んで雲うく春の日は浅間につづく雪嶺も見ゆ  
頗るなる風の温さよ何がなし萌え出づるものあるやも知れず  
芽吹きそむる落葉松林やはらかく内に沁み入る優しさのあり  
白樺の根方に白き鈴蘭は小花絶なしかすかにふるふ  
落葉松をこぼるる光やはらかく墨染衣の山頭火たつ  
夜も寝ねず噴くや浅間のうす煙ほのぼのとして胸熱くるる

坂上直美

小旅行

・天

縁ありて通う明日香の奥山に鶯の鳴く歌を作らん  
ヒメジョオン・カラスノエンドウ春の野のままごと遊びのおかずでありし  
花の名を一つおぼえし春の旅 木香薔薇のあふるる黄のいろ  
幼な子のことく声あげ渡りゆく飛鳥飛石はるの陽の下  
川上に坐す社の湍津姫 耳を澄ませばせせらぎの声  
野の藤の紫淡く空に満つ藤源境と人は言ふべし  
色淡き春の靴にて何處にも行かまし髪を風になびかせ

坂出裕子 桜

・洛

佐藤道子 心

・甲

特急に乗りかふるなく帰るみち急ぐことなしここまでくれば  
孫の世話をさせて帰る鈍行の空いた座席にお花見をする  
満開の桜ながめて鈍行のひとりの座席ひとりの世界  
ゆづくりとお花見をするゆづくりと走る電車にこころあづけて  
花見ればこころはなやく晴天の桜並木にとしを忘れて  
あと幾度見らるる花かそんなこと考へるなと花がささやく  
人生のをはりになりて人生の楽しみかたを少し知りたり

佐久間 晟

日乗(一一)

・湾

椎名恒治

木下で桜が見たい

・橋

卒寿越えれば寂しき言葉は禁句なり地球は常に瑞々とある  
町並みを今宵も満らす月の影まだまだ為したきことはあるのに  
火のごとき頭をもたげ時折は一人への愛、傍らの人  
今の世の何を見透かさんと疲れては眠りに落ちるぬばたまの夜を  
わが裡より失せゆきし何か恐ろしきものそれはああ師のあの笑い顔  
微粒子のような一人のわれに向き湧き出るような師の怒りの微笑み  
林道の奥に潜める瀬の音は何の怒りか師のさまにも似て

佐久間すゑ子

こぶしの花

・湾

鈴木結志

水葱の花

・福

もう何も要らなくなつた歳、今朝も庭の草草を見ている  
こぶしの花が咲き出した、冬を越した安堵の色を広げて  
こぶしの花が咲いて綿られていたトラウマがほぐれてゆく  
こぶしの花の下。だまつたままの夫と二人で見上げて  
こぶしの花は美しい空を背にして春を謳歌している  
香川スミレの芽が出はじめしなければならないことがまた一つ増えました  
香川スミレは今年も咲き出した。香川先生がまだ居るようだ

ロボット犬「何としてでも修理して」心通へる友となりしか  
物なべて心があるかと捨てられず断捨離身勝手と思ふことあり  
考へもなくて買ひ来し物多く我をうとみぬ老い極まれば  
車のキー預けて降りるにピピピピと小さく鳴りぬ置いてゆくなど  
用足して車に戻れば置きしキー小さく鳴りぬお帰りなさいと  
波の上平たき何か近づきぬ犬かきで来る愛犬なりき  
波に採まる犬を急いで誘導す浜辺に上げて抱きしめたり

椎名恒治

木下で桜が見たい

・橋

しきじろと憂れる空ぞ春は爛け仰きてをれば桜の盛り  
花の下より見たいと希ひるし桃ちやん四月九日昇天したり  
思ひ切りうたひ朗読しストレスを発散したしと短歌作りぬ  
六十余年車椅子にて生きたりし竹内桃子よ手製の歌集二冊遺しぬ  
老いたりし母御共々オーストラリア、イスイスなど巡り短歌作りぬ  
己れ病めど老いたる母を氣遣ひしうもありて涙ぐましも  
さだまさしのコンサートには欠かさず行きたりと桃ちやん略歴に記す

一片は妻の手がけし盆景や思いの深む白藤の花  
野菜より天とう虫をとり曾孫は研究者のごとビンに詰めゆく  
虫よけの知恵五歳児の曾孫が茄子と韭とを合わせ植えゆく  
追憶をひき出すほどや水葱の花滴に芽ゆるふかきむらさき  
在りし日の妻の思いを通わせる初咲き藍の朝顔の花  
設計師の息子の血つぐ曾孫五歳児の積み木遊びに趣向をこらす  
今日曾孫の誕生日春祭り重ねて祝う端午の節句

# 世木田照比古

青き野

・茜

# 高尾恭子

春それぞれ

・大

青き野は師の生誕地教多なる書作収めし記念館聳ゆ  
偲びつ見る師の書業に熱溢れわれ範とせんすべてを賭けて  
気にして足は上がらず階段に一寸の差で生爪を剥ぐ  
コーヒーのセルフの店でもつますきぬ若者らの眼が一齊に来る  
戀に寄る心晴らせと花水木天に向かいて一際白し  
ことし亦咲き初む小さき山野草賜わりし人の逝きて久しう  
いらいらと部屋を変えてはまた搜す搜すが日課となりて久しう

## 閑根榮子

天空の駅

・埼

頃合と行きたる苑の牡丹も散り季の速さにまたまどいつ  
十六夜かひとり明るき路地行けば幻めきて藤の花咲く  
成すべきと決めしもなくば「これで良し」ひとりこちして納得したり  
退化また崩落なりや意という細胞減りゆく齡ということ  
戦前の童謡集繰りて藤村の「蝶の子守唄」あるをみつけし  
天空の駅とう「中井侍」の天竜川を見下ろす鉄路  
また一つ廃線となるローカル線崖の花々咲き誇れるに

## 閑根和美

楠木神社

・埼

ふと目覚め庭の切り取り見する空 明星 三日月寒ざむとあり  
探るがの雨水の流れ岐れたり われは低きを選らず来りし  
作歌とふ命とつながる趣味ありてこの齢まで病身を保てをり  
歌材にと県境の峯の縦走とふ大胆 無謀なる事もせし  
自分が眼にて見たる思ひ表はせとの教へいつまで守り詠めるや  
それ故の歌材なりしが通院の車中と待合室のみの日々過ぐ  
「衣裳持ち」と言はる黒子を頃に持ちはのぼのとるし少女期のあり

## 高津砂千子

みどり

・風

楠公の首を埋めしという社かくれん坊の遊び場なりき  
かけふみのかげも消え入るかげの国くらき森もつ楠木さまは  
晩夏光にぶく宿せる用水に溺死の秀一とわにおさなし  
子ら食めば蜂の巣穴の態を見す供えられにし盆棚の蓮  
臺ならぶ祖母の生家をたいらげてショッピングセンター白く広がる  
すべらかに暗記せし事項ぬりかえる記事のあらわれ歴史息づく  
死は決して終わりにあらず身はいつも見える者に支えられて  
いるや

花道のようす「すみれの花」にのる阪急梅田開店十時  
まっさらな笑みに誘われ阪急の地下に一段重ねの弁当えらぶ  
右肩をいかせて子は発ちゆけり八重の桜のほわほわとして  
段ボール五箱と発ちし子の部屋に「ばくドラえもん貯金箱」あり  
新しきスーツ一着をひっさげて子は発ちゆけり天ざかる鄙  
あの人�훙ふくらむ高校の卒業式から回り道して  
還るべき海をさがせば二杯目の泡盛すすむ玄冬小説

## 高橋和代

歌材

・桃

滝田 靖子

無為

・新

田土才 恵

手造りの家

・宙

何を為す事もなきひと日休息と無為は同義語なのかもしだれぬ  
本当はどうなのだらう重ねたる君の手のひら少し冷たい  
重ね合ふ手のひら少し冷たくて永遠のやうなこの一瞬の  
見つめ合ふこの瞬間を水らせてしまつておかう君が笑ふまで  
心だけがひとり歩きする不器用なため息が聞を深くしたから  
その胸に懺悔を抱いて眠るがいい死人の記憶の残る身体の  
健康のために瘦せると医師が言ふ美容のために痩せたいわたしに

竹下妙子 卯の花月

・霧

硫黄山二五〇年ぶりの噴火なり火山灰降る里の地の底の音  
若き日に硫黄山に登りしに裡なるマグマ如何に鎮めむ  
乾きかるブランターのレタスより冷たき水の霧ふる 朝  
みづからを守るレタスか 夕されば透ける青葉を巻き重ねゆく  
せかさる思ひ断つがに遮断機の卯月の空は夕映えしまま  
疲れたる体を休め見る窓に卯の花月の雨のけぶらふ  
幾日も雨なく過ぎし堤防に白つめ草の小さく咲きぬ

田土成彦

枯れ草

・宙

大き日が水面を離れゆく刹那細文のここに見つむ

稻作も麻布もありて発掘は細文の世を塗り替へてゆく

一つ眺ね二つ眺ねでは水に入る石のつぶてのながくは飛ばず  
枯れ草の四、五本風に揺るときさやわかなかなしみのわく  
思はざる幹の高さにまひまひのふたつの角は朝の気を吸ふ

しののめの空に小雀の啼くきけば昨夜の雨はあがりたるらし  
五十億光年さきのひかりとか消ゆることなしそこの漂ひは

玉井綾子 非日常

・羊

洗濯物のはためく横の八重桜散り際の枝をやつと揺する  
忙しく入れっぱなしのティーバッグ朝の二分の位置づけ離し  
学校で会社で蓄積せる毒を寝つつ仰向き吐く子も夫も  
悪態をつきつづうなされ寝る吾子を尻目に空けるボテチ一袋  
春休み・晴れ・平日の旅日和・車を降りぬ花粉症の子  
孵化ラッシュ身動き取れぬ大量のおたまじやくしの泡立つ境内  
家族旅行その間たまる新聞を読みて終わりぬわが非日常

虎谷信子 祭日

・伴

さつき花庭をいろいろと頃ほひに、祭り日のくる 旧き慣習  
先立てる祭り太鼓の 音たかし。巡行神輿近近をろがむ

巡行の海道に入れば 若衆の 熱氣ことさら たかまりあふる  
祭神樂の巫子らすがしや鉦の音は、絶ゆることなく、夕べとなりぬ  
お旅所の夜店にぎはふ 若き日の、夢の綿菓子 七いろの彩  
杳き日は 地車並みてにはか芝居。宵宮にぎはふ 温もりのあり  
まみえねど歌詠む縁 誌上にのる、計報の御名に 冥福祈る

中島央子

薄墨桜

森

久我田鶴子 山蚕

・羊

日曆は弥生のをはり下野のうすみざくらの大樹にまみゆ  
磯石のみ残れる平ひるびるし野州あがたの国分尼寺跡

実生より育てし苗木移ししと美濃の二代目うすみざくら

歩一步むすめと廻る小半日金堂・経堂・鐘樓の跡

花見るは大人のみにて子供らはけんけんばづば磯石を跳びぬ

車椅子に押されてゆける老人の頬にかかるむ薄墨桜

天平の世のにきはひの聴こゆるや常より熱きわれの耳たぶ

中島義雄

岡

「挽歌ばかり詠みさらばへて何とする」友の小言も身を熱くせず  
もろともに負ひし貧困も紛き得し喜びもなべて一睡の内

過ぎしものに縋りて生くるに非されど萌え立つことく仰ぐ樹もなし  
敵意露はな歌評も来よと氣負ひたる世を遠くして人間無慙

背を立てて歩むとわれを人言へど胸張りて生くる歩幅に非ず  
爺と摘みし土筆樂しと来るメールぬかるみの坂を雨が洗ひぬ

それといふ欲望もなく日が暮れて遠き相聞を蘇す無聊さ  
永塚節子 立浪草

銀

冬を越え今し芽吹きの時なるにいちょうばっさり枝を切らるる  
しらしらと切り口さらすいちょうの樹冬の寒さの戻らぬことを  
風にゆるるいちょうの若葉は女童の口元おさえる両の手に似て  
おちよば口押さえて笑まう女童の木彫の像の作者出で来ず  
波頭立てつつ寄するしらなみの形そのまま立浪草は  
伸ばしたる地下茎一列鋪装路のわざかなあいより白きたつなみ  
波のかたち模したることき白花に競いて咲けるむらさきも良し

大木の桑にからみて蔓太き藤の花房ごとしの長さ  
キーワイの葉っぱになりきり眠りゐる夏日の蛙かけをえらびて  
三人で交はす会話に遅れつ母が時を置き物になる  
どこを歩いてきたかと弟わが肩につくる虫を取りてくれたり  
わが肩につくるし虫は山蚕ちひさきながら蚕の動きする  
なつかしく蚕と言ふを見つむるに父のまなこが横に來てゐる  
養蚕を現金收入の手だてとし養ひくれし父母ありわれに

### ● 「高野公彦インタビュー ぼくの細道うの道」

【聞き手】栗木京子

「歌壇」平成二十八年六月号から翌年五月号まで連載された高野公彦へのインタビューに、終了後の「歌壇」六月号に掲載された「高野公彦氏への20の質問」を併せて一冊にしたもの。高野の生まれ育ち、短歌との出会い、宮柊二夫妻との接触、その後の短歌との関わりについて、聞き手の栗木京子がうまく聞き出している。その中には、小野茂樹逝去時の高野の日記も公開されており、貴重な資料ともなっている。高野公彦と小野茂樹は、当時ともに河出書房に勤務していた。小野の『黄金記憶』出版にも高野氏の力添えがあった。

# 今月の二人

## 夕焼け

小田 淑子

卯の花の頃

いつの日も変わることなき父の遺詠しばしば尋ねもとめ見つめて  
しなやかにやさしく揺るるコスモスが好きと言いしは四十の父

「馬が好き」「日がかわいい」と午年の生まれの父の道楽は馬  
長寿という手相をながめ枠掛の右手をこする父のしぐさよ  
きれぎれになりなお残る記憶あり向かい合い父と覗ほる昼  
いろのなき夢に目覚めて汗ばみぬ若き日の父の顔の鮮明  
父逝きて五十回忌を過ぎたれば長き歳月潮のごとし

半ば醒め半ばねむれる母の手を呼び戻すように引き寄せている  
くしゃみするその一瞬がほんとうの母のようにも われの感覚  
「おかあさん」呼べばかすかに領きてそのまま私の歌に眠りぬ  
たまねぎを透き通るまで炒めつづこれから母を想いし日の暮れ  
幼き日いだかれしこと母を抱き夕焼けを窓のそばに見たりき  
まぎれもなく生きたる九十二年なりおだやかに母のねむりたる朝

母は、ときおり奥歌まじりに野菜をさざ  
んでいました。包丁の音が「夏は来ぬ」の  
メロディーによく合うなど聞いていると、  
「おから炊いたんよ」と嬉しそうに。  
追憶にひたっていると、「卯の花や父は  
語り母うたうー」私のすなおな五七五がで  
きあがりました。

今年の秋に母の七回忌法要を営みます。  
十年の間胃癌をして過ごし、九十二歳の命  
を全うしました。父は四十五歳の若さで亡  
くなり、五十回忌を済ませました。

美しい楷書の文字を書いていた父の姿、  
俳優の佐田啓二に似ていると言われ照れな  
がらも嬉しそうだった顔が思い出されます。  
病弱だった父を献身的に支えた母は、歯が  
白くよく笑い朗らかな人でした。健康だっ  
た母は父の二倍の年を生き、私と一緒に暮  
らし穏やかな晩年でした。

まもなく卯の花の季節ですが、父が唱歌  
「夏は来ぬ」(佐木信綱作詞)の文語体の  
ことばについて教えてくれたことがありました。  
歌詞にあらわれる時鳥・棟・水鶴・  
などについて話してくれました。学校で  
古文を習い、歌詞を五番まで書き写した頃  
のことです。

# 今月の二人

山 萩

山田香代子

三つのふるさと

風薫る光まぶしき野に母と摘みし蓬の香りのさだか

里山の御祖の墓の彼岸ばな手折るをいさめし祖母の声きく

山萩はいつも故郷連れきたるその紅のつぶらなる顔

葉ぞうり泥をはねはね遊びたる湖底のふるさと杳き走馬灯

白樺の林に入りて白樺の白きはだえにつつまれて立つ

雪どけの雄々しく流れる谷川に沿いてなに花濃きむらさきの

高原の雨はつめたしこもり日は針の木岳の雪に真むかう

扇沢に至る大町アルペンのラインに関電宿舎のありき

昼と夜の長さ等しくなる朝笹なき聴くを亡夫につたうる

ひとり居の朝を預くるムーミンの起きろと命令日ざまし時計

ねこは家族いぬも家族と姫いう月下美人はわが家族なり

生涯を学びと思うはいつよりか机並ぶる友多くして

歳重いてよみがえりくる故郷よダム湖にねむるかの川わが家

第一の故郷は「夕やみの声流れゆく早瀬かな」と句に詠まれた、宇治川に田原川が流れ入る、出合と呼ばれる景勝地で、桜や紅葉の名所でもありました。

お月見をしに宵待橋、家族揃って餅つきをした土門、水車小屋など、なつかしく心に深く残っている。私が生まれた「末山」の一、永久忘ることなき故郷です。

第二のふる里は、調査隊に加わりてより長年を黒四ダムの建設に経し父を訪ねた信州です。学生時代の私は春休み、夏休みに赴き宿舎を拠点に志賀高原、上高地、美ヶ原と方々を訪ねました。雪の穂高や立山連峰は多感な頃の心を癒してくれました。青春湖での花火大会は今も目に焼きついています。(まさに青春のふる里です。)

第三のふるさとは、四十余年暮らすこの地、山科です。一人の子供を育て、夫を見送った後をひとり居となりましたが、短歌や俳句、篆刻と共に学ぶお友達や先生に支えられて過ごしています。離れがたい心のふるさととなりました。

奇しくも父は黒四ダムの建設に携わり、祖父母や両親、兄弟共に暮らした家は天ヶ瀬ダムの湖底に静かに眠っています。

## ◆今月の二人・小田淑子作品評◆

## 幼き日いだかれごとく

小田さんは、広島県福山市在住。父は四十五歳で亡くなり、母はその倍を生きて九十二歳で亡くなったという。

・しなやかにやさしく揺るるコスマスが好きと言ひしは四十の父

コスマスが好きと言つた四十歳の父。その時、作者は何歳だったのだろう。さりげない言葉が、今も娘の胸に残る。

・長寿という手相をながめ枠掛の右手をこする父のしぐさよ

枠掛筋は、長寿の手相で、手のひらの中央を横に貫いた筋。長寿の手相を持ちながら早く世を去ってしまった父を、生前のしぐさを思い浮かべつつ偲んでいる。

・くしゃみするその一瞬がほんとうの母のようにも われの感覚

こちらは、老いた母の歌。くしゃみする瞬間は、老い衰えた普段の母とは違って、意外なほどに力強い。これが「ほんとうの母」かもしれない、そう思いたい「われの感覚」なのだ。

・たまねぎを透き通るまで炒めつつこれらの母を想いし日の暮れ

単純な家事労働が、ものを思う大切な時間であり、慰めにもなるということ。夕餉の支度をしながら老母の「これから」を想つた日を、「これから」も過ぎ去った今、思い起こしている。

・幼き日いだかれし」とく母を抱き夕焼けを窓のそばに見たり

き 母に抱かれた幼い日、母を抱いて夕焼けを見た日、そのことを思い出している今。重層する時間が見せるもの！

## ◆今月の二人・山田香代子作品評◆

## いつも故郷連れてきたる

評者・久我田鶴子

山田さんは、京都市山科区在住。生まれ育った所は、月ヶ瀬ダムの底に眠るという。

・風薫る光まぶしき野に母と摘みし蓬の香りのさだか

懐かしい故郷の風景が、母との思い出とともに蘇る。光の感触、風の匂い、蓬の香り。五感で感じ取ったものが、今も「さだか」に。

・山萩はいつも故郷連れたるその紅のつぶらなる顔

山萩は、故郷と繋がる馴染みの花であったか。「故郷連れたる」、つぶらな花を「顔」と表現しているところからも、馴染みの身内という感じがする。

・扇沢に至る大町アルペンのラインに関電宿舎のありき

黒四ダム建設に関わった父。作者は父のもと（関電宿舎）に行つては信州のあちこちを訪れたようだ。扇沢・大町アルペングライン・関電宿舎といった地名や固有名詞が活きて、作者の思い出につながる。

・ねこは家族いぬも家族と姻いう月下美人はわが家族なり

猫も犬も家族と言う人に、対抗して「月下美人はわが家族なり」と言挙げている。山萩を馴染みの身内のように思う人らしい言挙げだ。

・歳追いてよみがえりくる故郷よダム湖にねむるかの川わが家一年を追う毎に蘇つてくる故郷よ、というのだろう。「年老いて」ではない。初句は、「年を追い」くらいの方がいいか。今はもうダム湖の底にねむる故郷だが、年を追う毎に「かの川」「わが家」とひとつひとつが鮮やかに蘇つてくるのである。

自然豊かな田舎に生まれた私は、外で遊ぶのが好きな幼少期を過ごしてきました。中学の国語の時間に教師が「男ならすぐ汲もうに水鏡」と板書し、意味を問われたのですが、私は全くわからず苦い思いをしたこと、それにその時の教師の言葉に傷ついて国語の時間そのものが嫌になった程度です。高校生になり、友人は俳句、短歌、隨筆と学級新聞に投稿しておりましたが、私は縁遠い存在だったのです。卒業後、バスで一時間かかる坂道に就職し、結婚、仕事、家事、育児と目まぐるしくひとりの時間など全くない生活がつづきました。

そんな大変な状態から少し解放されかけて来た頃でしょうか、友達に誘われ何気なく一緒に行った所が浜本美美氏が中心となって行われていた地中海、夢グループの短歌会場だったのです。そこで好印象を持った私は、この人達と仲間になる事は、今の私にとって息抜きの一つになるのではと思われ單純な気持で仲間に加えていただいたのです。が、何の素地もない私には想像以上に大変なものでした。二、三首がやっとで息抜きどころか大きな負担となってしまったのです。いつしかもう駄目だ、やめよう、といつ言い出そうか、そんな事ばかり考えるようになつたのです。そうこうしていた折、

## 私と短歌との出会い 191

### 宮西千代子

勤務先の理事長が浜本氏に短歌を習うので一緒にと声をかけていただき、重い気持のまま六人の仲間に入ることとなつたのです。だが、仲間同士の雰囲気がとてもなごやかで集まるだけで楽しくひと時の安らぎの場を与えてくれました。作品の出来不出来は別として宿題だけは持つてずっと続けました。はじめた仲間の人達は、どんどん上達していきます。私は落ちこむばかりでしたが、仲間同士の雰囲気がとてもなごやかで集まるだけで楽しくひと時の安らぎの場を与えてくれました。作品の出来不出来は別として宿題だけは持つてずっと続けました。最初に浜本美美氏の言われた事を思い出すのです。短歌は紙と鉛筆があればいつでもどこでも人の邪魔にならず出来る事だし、老いてはボケ防止にもなるしネ。

時間が充分すぎる程ある現在、何もする事ないんよ。と言つておる同世代の人の声をきく時、しめ切りのある短歌のおかげと言うか、素材さがしに寒くても暑くても外出するのが苦にならず、それに頭も少しは使うことになるので、体と心の健康が保たれているように思われるのです。

今はグループの若い人からエネルギーをもらうために出席している短歌会ですが、明るく、屈託のない環境にいつも心をほぐされておりました。こんな状態の中にも歌が出来なく、止めようと懇意心が頭をもたげることがありました。不思議と言うが、時、気ながに導いて下さった浜本美美氏やグループの皆さまに心から感謝しております。そして自分なりのスタイルでこれからも短歌がつづけられたらと思っております。